

聖女テレサの愛の矢の突きさしに関する神学的試論

Ensayo teológico sobre la trasverberación
de la flecha amorosa a santa Teresa

菊地章太
KIKUCHI Noritaka

要旨

ポルトガルのカシウカイシュ教会に、聖女テレサの「愛の矢の突きさし」の絵が飾られている。17世紀バロック時代の女性画家ジョゼファ・ド・オビドゥスの作品であり、スペイン神秘主義を代表するテレサの生涯を描いた連作のひとつとして知られる。テレサ自身の記すところによれば、天使が燃える矢を手にして、いくたびか心臓を突きさしたという。このとき聖女はみずからアロバミエントと呼ぶ魂の高揚のただなか¹にいた。聖女の心臓は炎につつまれ、倒れかかる体を天使をゆだねている。光のかなたにある闇のなかで神とひとつになろうとしたのである。聖女にとってそれは信仰の極限の姿にほかならない。

こうした異常なまでの魂の高揚という信仰の基盤には、ヨーロッパにおいて長い時間をかけて築かれてきた神秘神学の思想がある。4世紀のギリシア教父であるニュッサのグレゴリオスは、真実を求めてやまない愛^{エロース}が、惜しみなくそそがれる神の愛^{アガペー}によって高められ、ここに神と人とのまじわりが生ずると考えた。ディオニュシオス・アレオパギテースの名で呼ばれる7世紀の修道士は、これを受けて神秘神学への道をひらいた。のちの神秘主義者たちは言葉によって語ることの困難を自覚しつつも、言葉を尽くして神秘の体験を語ろうとする。そうした伝統の上に、テレサの愛の矢のヴィジョンが実現したのである。

キーワード：聖女テレサ カトリック神学 神秘主義 キリスト教美術 スペイン

1. 海辺の町の教会にて

ポルトガルの西のはて、大西洋をのぞむロカ岬の近くにカシュカイシュの町がある。海辺の保養地として知られるが、昔ながらの漁村のおもかげも残している。海岸通りから少し入ったところに聖母被昇天教会がある。白い壁でおおわれた建物のなかに、「聖女テレサの突きさし」と呼ばれる絵が飾られている。

本稿は、16世紀のスペイン神秘主義を代表する聖女テレサの生涯の一場面を描いた絵を手がかりに、聖女みずからが書き残した記録と照らしあわせつつ、その神秘体験の意味するところを明らかにするものである。そのうえでヨーロッパにおける神秘神学の流れのなかに、聖女の体験を位置づけることを試みていく。

聖女の絵にもどりたい。天使のひとりが矢で聖女の心臓を突いている。心臓は炎に包まれている。聖女が気をうしなって倒れそうになるのを、ふたりの天使が両脇から支える。聖女は天使に身をゆだねている。その表情は、矢の突きさしにまるでとろけていくようである。天使はみな少女のおもごしである。たおやかな陶酔の世界がここにある。

聖母被昇天教会は現在は教区教会として使われているが、もとはカルメル会女子修道院に付属していた。この絵はカルメル会の改革者である聖女テレサを讃えて制作されたものである。聖女の生涯の場面が連続して描かれており、他に聖母マリアと夫のヨセフが聖女に首飾りをさずける場面がある。ふたりは聖女が修道会を改革したことを祝福している。キリストが指輪をさずける場面もある。14世紀のシエナの聖女カテリーナも経験した神秘の婚姻を表している。これにはプロトタイプとなったものがある。4世紀のアレクサンドリアの殉教者カテリーナも、まぼろしのなかでキリストから指輪をさずかった。その名は古くからマルティロロギウムと呼ばれる教会の殉教者暦に記されてきた⁽¹⁾。

作者のジュゼファ・デ・オビドゥスはポルトガルのバロック美術を代表する女性の画家である。1630年にスペインのセビーリャで生まれた。当時、ポルトガルはスペインに併合されていた。画家であったポルトガル人の父がセビーリャで修業し、その町でスペイン人の女性と結ばれた。ふたりのあいだに生まれたのがジュゼファである。

父はコインブラのガラサ修道院教会で祭壇画の制作にたずさわることになった。ポルトガル最古の大学のある町である。ジュゼファはこの修道院の寄宿生になり、そこで画業をはじめた⁽²⁾。彼女の作品のいくつかはこの町にも残されている。その後、一家は父の故郷であるオビドゥスに住んだ。リスボンの北、コインブラとカシュカイシュを結ぶ道沿いの町である。ジュゼファは1661年にこの町のサンタ・マリア教会で、シエナの聖女カテリーナの祭壇画を描いている。そして1667年から翌年にかけて、カシュカイシュで制作したのが聖女テレサの連作であった。



ジュゼファ・デ・オビドゥス「聖女テレサの突きさし」カシュカイシュ教会、1668年

2. 傷つけられた神の姿

テレサは1515年にスペイン内陸部の町アビラで生まれた。そこはイベリア半島のなかほど、マドリッドの北西に位置する。海拔千メートルの中央高地にある中世の町である。旧市街はいかめしい城壁で囲まれている。司教座が置かれていたので、それほど大きくない町のそこかしこに教会がある。

聖女の本名はテレサ・デ・アウマダという。貴族の家で9人兄弟、3人姉妹のひとりとして生まれた。やがてスペイン神秘主義において最大の人物となる聖女の生涯は、自伝である『生涯の書』によってたどることができる。

テレサは多くの子どもたちのなかで「父にいちばん愛された」と語っている。おさないころ、大好きだったすぐ年上の兄とともに聖者伝を読み、神に命をささげたいと思った。ふたりで物乞いをしながらイスラームの国へ行き、そこで首をはねられようと決意した。兄と町を出て歩きはじめたところを、親族の者に見つかって止められたという。

母が33歳の若さで亡くなった。テレサは12歳になる前のことだと語っている。その3年後にアビラの町のサンタ・マリア・デ・グラシア修道院付属学校の寄宿生となった。そこで修道女からいろいろな話を聞くうちに、心に「永遠なものへのあこがれ」をいただいたという⁽³⁾。そのうちに健康を害してしまい、寄宿生活を断念して家へもどった。兄たちが新大陸に旅立つころのことである。

はたちになったテレサは修道生活に入る決意をかためた。しかし娘を誰よりも愛していた父は同意しない。とうとう家を抜けだして、町の城壁の外にあるカルメル会のエンカルナシオン修道院の門をくぐった。2年後に、修道女となって神に身をささげる修道誓願を立てた。ところがまもなく心臓発作におそわれ、修道生活をつづけることが困難になる。心身ともにひどく苦しんだあまり、神に見捨てられてしまうのではないかと恐れおののいたという。

27歳になったテレサは健康を快復することができた。父の最期をみとったあと、修道生活に復帰した。そこでテレサは30年近く暮らし、のちに修道院長となった。1582年に67歳で亡くなるまで会の刷新につとめることになる。

ある日テレサはキリストの像の前で祈っていた。痛ましい傷を負ったキリストの姿に、はげしく心が動いた。こんなにも傷つけられた神に対して、自分はひどい応え方しかしてない。そう思うと心が引き裂かれそうになって、その場に倒れこんだ。テレサは自分に対する信頼をまったく失い、神にすべてをゆだねた。その思いを「主はたしかにお聞きいれくださった」とのちに語っている⁽⁴⁾。これは1554年の復活祭直前の体験とされる。40歳になる前のことだった。テレサが見たとされるキリスト像は、今もエンカルナシオン修道院に残されている。

テレサが62歳のとき、1577年にまとめた『魂の城』という書物がある。カルメル会の管区長の勧めにしたがい、「姉妹であり娘である」修道女たちのために書かれた。人の魂を城にたとえ、城のもっとも奥にいる神のもとへと進んでいく、その歩みをたどった書物である。そこへたどり着いたとき神との一致がはたされるという。

そこには先ほどのキリスト像の体験を思わせる教えが記されている。「十字架像の前でひどく心を痛めている人がいた」という。年下の修道女たちを導くための書物なので、あえて三人称で語られているが、「心を痛めている」のはかつてのテレサ自身にちがいない。

その人は、何も主にさしあげられるものがなく、主のために捨てることのできるものもない。そう思って悲嘆にくれていたのである。すると、十字架の主がみずからその人を慰めてくれた。主は告げる。「自分が受難にあったとき忍んできた悲しみと苦しみをすべてあたえよう。それを自分のものとして父なる神に捧げるように」と⁽⁵⁾。その人の魂は慰められた。ありあまるほどゆたかな気持ちになることができた。それからのちも、自分がひどくみじめに感じるとき、そのときのことを思い出しては慰められ、励まされているというのである。

ここでテレサは念を押す。「あなたがたはそれを私のことだと思ってはいけない」と。そんなことよりも、たえず自分の貧しさを思うがよい。私たちはあたえられたもの以外には何も持っていない。そのことを心に刻むよう努めよ。それが主に喜んでいただくことになるのだという⁽⁶⁾。

3. 開示される神秘の諸相

キリスト像の体験を境に、テレサは神の恵みのきざしを何度も体験するようになる。突然に神が自分に迫ってきて、「神が私のうちにおいでになる」と感じる。あるいは「私が神のうちに完全に沈められている」ことを疑うことができないほどになる。魂は神との「一致」によって、このうえない喜びに浸っている。その「喜びの涙によって消え去ってしまいたい」と思うばかりだという⁽⁷⁾。

神が自分のなかにいる。この体験をテレサは「神秘神学」と呼ばれるものにちがいないと確信する（当時は学問だけでなく瞑想の修業などもこの言葉に含めている）。そのとき魂は茫然となって、目の前のことにただ驚くばかりである。心は神への愛に向けられていても、記憶は失われたようになるという。神との一致のなかでエクスタシーに達し、あらゆる感覚器官に変調が生じる。後述するディオニシオス・アレオパギテースが記した神秘神学のさまざまな要素が、テレサによって体験されていく。

テレサはエクスタシーという言葉はあまり使わない。16世紀のスペイン語にはそれに該当するエスタシという言葉があるが、それよりもアロバミエントという言葉が好きで用いる。それは「高揚であり、魂の飛翔であり、奪い去ること」だという。いずれも同じものを意味し、エスタシとも呼ぶと述べている⁽⁸⁾。つまりアロバミエントはエクスタシーと同義なのだが、ここでは本人が選んだ言葉を用いたい。

それは絶頂の状態である。神が魂を奪い去ってしまう。そのとき目は閉じられ、たとえ開いていても何も識別していない。音を聴くこともできない。あらゆる感覚が神との一致のなかで失われていく。体の重量がなくなったように思われ、足が地面についていることさえ感じられなくなる。今何が行なわれているのか知りようがなく、私たちが「それを知ることが神も望まない」という⁽⁹⁾。

アロバミエントに達したとき感覚は突然なくなる。テレサはそれをくりかえし語っている。ただ、体が冷たくなっていくのだけは感じられるという。それは「このうえなく心地よく、このうえなく喜ばしく、あらがうすべなどない」のである⁽¹⁰⁾。こうした状態が数日間つづくこともある。それでも意志だけはめざめていて愛に燃えている。しかし「あらゆる被造物への愛着は眠りに落ちている」のである。この停止状態が徐々に緩和されていくと、体が自分をとりもどしていき、「ふたたび死ぬために」呼吸をはじめるといふ⁽¹¹⁾。

アロバミエントは激しく襲いかかってくる。何の考えも浮かばないうちに魂が急に囚われてしまう。「この雲が自分を運び去るのを見る。大きな鷲がその翼で自分を連れ去ってしまうと感じる」とテレサは語る⁽¹²⁾。そして魂が高みに至ったとき、そこは光にあふれているが、「この世の光とはあまりにちがう」光がある。私たちが何十年かかってもその千分の一も理解できない神秘を、その光はただの一瞬のうちに魂に開示する。その事実は忘れられないほど強烈に記憶に刻みつけられる。しかしそれは「あまりに崇高で、それを説明できるほど深く理解することは、この世に生きる者にはふさわしくない」といふ⁽¹³⁾。

テレサはここでひとつの譬えを出してくる。スペインの名門として知られるアルバ公爵の館を訪れたときのことである。1574年に新しい修道院の設立にたずさわると、サラマンカからセゴビアに向かう途中だった。請われるままにそこに立ち寄り、公爵夫人の部屋に案内された。そこでスペインの貴族の館によくあるカマリンと呼ばれる奥部屋に入った。ガラスの器や陶器が無数に並べてある。テレサはこんなに多くの宝物がいったい何の役に立つのかとあきれている。しばらくして部屋を出るなり、そこにあったものをことごとく忘れはてた。まるで何も見なかったかのように、何ひとつ記憶に残っていない。どこにどういうものがあつたかを言うこともできない。ただ、「それを全部見た、ということだけは思い出すことができる」といふのだ⁽¹⁴⁾。

私たちの魂が神とひとつになるときも同じだという。魂の城の奥部屋に入って行く。そこでは神と

ともにいる喜びに浸りきって、魂は満ちたりてしまう。さて我に帰ってみれば、自分がそこで大いなるものを見たことは思い出すことができる。しかし何ひとつそれを言い表すことなどできない。神が開示したものに圧倒されればそれでよいのである。神の領域にあるものを人が理解したり説明することなど神は望んでいない。神が望んでいるのは、「ひたすら恵みをあたえられる人」がいることだけである。だから、私たちが神に望まれるようになるには、自分を「完全にゆだねること」が必要だという。

神を選ぶのである。人にできるのは絶対者にまかせきることだけである。テレサは修道女たちに言った。神はあなたがたの魂をもう奪ってしまっているのだと。つづけて言う。「神はあなたがたをすでに自分の花嫁と見なしておられると信じなさい」と⁽¹⁵⁾。

神とまじわるところへ到達した魂にとって、ふたたび世のなかのことにわずらわされるのは耐えがたい。「この世のへたくそな芝居を見せられたうえ、体に気をくばったり、寝食に時間をとられたりするのはいくらほどつらいことか」とテレサは嘆く。まるで「縛られて牢獄にいる自分を見る」ようなものだという。だから、魂が奪われてしまうときの苦痛などはたいした問題ではない。なにしろ「一瞬のあいだに魂はこの牢獄から解放され、やすらぎの場に導かれる」のだから⁽¹⁶⁾。それは神に魂を支配された至高の時間にほかならない。

しかしそうした至高のアロバミエントが絶え間なくつづき、人前でもそれを避けることができないでいたりすると、たちまち陰口と迫害の嵐に襲われる。この女は死んだのかとすぐに勘違いされる。とくにそれは聴罪司祭に多くありがちだという。それはイエズス会士あるいはドミニコ会士であった。こうした神秘の営みをまるで理解しない聖職者は少なくない。テレサはそれをくりかえし述べている。神に選ばれたという「その偉大さは、彼女から出たものではない」はずだ。そのことを理解してもらえらば、どんな代価を払ってもよいという⁽¹⁷⁾。

神を選ぶ。人の力でそこへ到達するのではない。それさえも理解されていないのである。今このアビラの町にも「主がこのような恵みをあたえてくださる人たちがいる。それを知ってもらえたらとテレサは願う⁽¹⁸⁾。ここには「人たち」とあるが、実際にはテレサひとりだったのかもしれない。

4. 愛の矢の突きさし

テレサにあたえられた恵みとはどのようなものか。

その典型が愛の矢のヴィジョンである。神はテレサに天使を見せることを望んだ。彼女が見た天使はみな小さかった。どの顔も燃えるようにほてっていて美しい。愛に燃える天使のなかでももっとも位の高いものようであったという。これはディオニュシオス・アレオパギテースが『天上のヒエラルキーについて』のなかで論じた最高位の天使セラフィムのことである。「燃やしつくして清らかにする」天使だとこの神学者は記している⁽¹⁹⁾。

テレサは天使が長い金の矢を手をしているのを見た。「その矢の先には小さな炎が燃えているようで、それでいくたびか私の心臓を突きさした」という。矢は心臓をつらぬいて体の奥底へ達した。その矢を引き抜くとき、体のなかまで持って行かれるような気がした。テレサは神のこの大いなる愛にすっかり燃えあがってしまう。痛みは激しく、何度も声をあげてしまった。「この痛みのもたらす快

さはあまりに大きく、魂はこの痛みがなくなってしまうことなど望まなかった」とテレサは言う⁽²⁰⁾。

光栄に満たされた痛みのなかで自分をうしなった。魂は傷つけられたのだ。魂が「この愛を来たらせるために」自分からは何ひとつしていない。神のあまりにも大きな愛が、「いきなり火の粉をふりそそいで魂をまるごと燃えあがらせてしまった」という。愛の炎につつまれ、傷つけられた喜びのなかでテレサは祈った。「こんなにもわずかしかお応えできない魂に、こんなにもたくさんの恵みをあたえてくださる主は、永遠に讃美されますように」と⁽²¹⁾。

最初に紹介したポルトガルの教会の「テレサの突きさし」は、まさしくこの場面を描いたものである。炎の矢で突かれたテレサの心臓は、胸のなかで燃えあがっている。テレサがこの愛の矢の喜びに満たされたのは、アビラのエンカルナシオン修道院の院長だったときのことと考えられている。1571年から74年までのあいだである。8月27日に起きたとされ、スペインの教会では今もこの日を「突きさしの日」として祝っている。

テレサが亡くなって9年後の1591年、彼女を福者の列に加えるための調査がおこなわれた。サラマンカ大司教は遺体を墓から掘り出させた。遺体はまったく腐敗しておらず、芳香をはなっていたという。このときの供述書はカルメル会によって公刊されている⁽²²⁾。のちに遺体から心臓が摘出された。そこには刺し傷がいくつか認められ、傷の周囲にわずかに焦げたあとがあるという。心臓は聖遺物箱に納められてアルバ・デ・トルメスのカルメル会修道院に安置された。アビラの北西、サラマンカの郊外にあり、彼女が亡くなった場所である。今もそこを訪れる人はあとをたたない。

テレサが直観した神の愛のヴィジョンは、同時代の神秘主義者によって共有されていく。日本で「十字架のヨハネ」と呼ばれるファン・デ・ラ・クルスも、それを受けついだひとりである。テレサとならんでスペイン神秘主義を代表する人物とされる。

ファンの詩集『生きている愛の炎』の最初の詩に、「ああ、生きている愛の炎よ、なんて優しくあなたは傷つけるのか。私の魂の深奥を」とある。愛の炎が魂の深奥を傷つけるのである。「深奥」と訳したところは直訳すれば「もっとも深い中心」である。ファンがみずからこの詩を解説した文章があって、そこでは「魂の底」と言い換えている。神への愛が深まるにつれ、魂は「神のなかへ深く入っていく」とも語られる⁽²³⁾。だから魂の「中心」なのだろう。

こうしたイメージのもとにはテレサの『魂の城』があるにちがいない⁽²⁴⁾。そこでは魂は城のもっとも奥深いところ、つまり魂の中心で神とひとつになると語られていた。ファンはテレサからさまざまな影響を受けている。テレサもファンのたぐいまれな聖性を重んじた。テレサ50代、ファン20代のときに会って以来、ふたりはともにカルメル会の改革をになっていくのである。

テレサは没後40年目の1622年に列聖された。イグナチオ・デ・ロヨラやザビエルと同時であった。彼らは没後70年近くたっているから、テレサが教会から栄誉をさずかったのはかなり早い。修道会の刷新にはたした彼女の功績はもとより、エンカルナシオン修道院での愛の矢の幻視が列聖の調書に記載された。この世ならざる体験で埋めつくされた数々の記録が、教会によって公認されたのである。のちに彼女の著作は神秘神学の最高峰のひとつと見なされるまでになる。前教皇ベネディクトゥス16世も、テレサを「すべての時代のキリスト教の霊性の頂点に立つ」聖女とたたえた⁽²⁵⁾。

5. 教父神学からの伝統

テレサは『魂の城』のなかで若い修道女たちに呼びかけた。「私たちはいったい何をしているのか。何をとまどっているのか。花嫁が町や広場を巡るように私たちは主を探しに行く。何が私たちに妨げることができるというのか」と⁽²⁶⁾。

ここに出てくる花嫁というのは、旧約聖書の「雅歌」に歌われた花嫁のことである。そこにはこうある(III-2)。「さあ、私は起きて町を歩き回ろう。あらゆる通りや広場で、心から愛する方を探してこよう」と。「雅歌」は男女の愛を歌いあげている。神という言葉は出てこない。もとの題名は「歌のなかの歌」である。古代のイスラエル民族が婚礼のときにかわした歌ともいわれている。

愛しあう男女が寝てもさめても相手のことを思い、激しいまでに求めあう。心変わりに苦しみながらも、いつかふたたび愛をとりもどし、ひとつに結ばれていく。旧約聖書をまとめた人々は、ここに歌われている若者を神になぞらえ、おとめをイスラエル民族になぞらえてきたのである。キリスト教世界にもその伝統が受けつがれた。神と人との愛のまじわりを象徴的に歌いあげたものと解釈されるようになる。こうした象徴的な解釈はとりわけ神秘神学のなかで重んじられ、多くの神秘主義者が「雅歌」の注釈を試みた。

テレサがいただいた愛の矢のヴィジョンは、こうした「雅歌」解釈の伝統と大いに関係があるだろう。もとの歌にはこうある(V-8)。「エルサレムのおとめたちよ、私に誓ってください。私のいとしい方を見つけたなら、こう伝えてください。私は愛に傷ついている」と。歌の最後に「傷ついている」とあるが、旧約聖書のギリシア語訳セプトゥアギンタにこの言葉が使われている⁽²⁷⁾。ヘブライ語のもとの言葉は「病んでいる」を意味する⁽²⁸⁾。旧約聖書が地中海世界に伝えられていくときギリシア語に訳され、その過程で「傷ついている」という表現に変えられたのである。愛に傷つくという言葉への転換が出发点となって、新たな歌の解釈がはじまっていく。

ニュッサのグレゴリオスは『雅歌講話』に言う。「私は愛に傷ついている」と語るこの花嫁は、「形がなく燃えさかる愛の矢で傷つけられた」のである。この矢は物質的なものではない。肉体を傷つけることなく、心の深みに達する。そうして「愛に高められた」のである。だから花嫁は自分の傷を誇らしく感じたのだという⁽²⁹⁾。

エロスという名の愛がある。もとはギリシアの神の名である(後世には愛の矢をもつキューピットの姿で表された)。激しい情熱をつかさどっている。ギリシアの哲学者たちはそれを知的な営みとしてとらえた。真実の世界を求めてやまない情熱と理解した。もうひとつの愛であるアガペーはキリスト教からはじまった。キリストは世の罪を贖って十字架につけられた。神にそむいた私たちの罪をゆるす神の愛がそこにある。エロスが人の側から発せられるのに対し、アガペーは神の側からくだされる。惜しみなくあたえられる愛である。

グレゴリオスはこのふたつの愛をもっと強く結びつけて考えた。神とひとつになろうとする情熱を燃え立たせるのはアガペーだという。その呼びかけにエロスがこたえる。アガペーの力でエロスが神に向かうのである。神と人とのあいだに愛のまじわりが生じる。このように考えることで、アガペーとエロスの関わりをのちの神秘神学につながる次元へと高めたのである。

グレゴリオスはギリシア教父のひとりである。371年にトルコのニュッサという町の司教になった

ことが知られる。新プラトン哲学をキリスト教思想に融合させて神秘神学への道を準備した。その主著のひとつが『雅歌講話』である。そこでは愛の矢をエロースと呼んでいた。愛に傷つきたいという思いはエロースから出発する。その思いは高められ、アガペーの力で愛に傷つくことが成就するのである。『雅歌講話』はさらに言う。おとめたちは願うであろう。愛の矢について私達も知りたいと。「愛の矢が心の深奥であなたを傷つけ、甘美な痛みをもたらし、情熱を燃えあがらせる」のだから⁽³⁰⁾。

これを受けたのがディオニュシオス・アレオパギテースの『神秘神学』である。著者を新約聖書「使徒言行録」(XVII-34)に登場する人に擬してあるが、事実は6世紀のはじめころシリアの修道士が著したものと判断されている。キリスト教神秘主義におけるひとつの極点を示す書物である。全体の分量はわずかであり、『ギリシア教父文書集』のラテン語対訳本文でも行数は180行に満たない。文章はおびただしいほどの否定辞をつらね、人の理解をこえた神との合一のありようを開示していく。

最初に「神の闇」について語られる。神は神秘の言葉、すなわち言葉を越えた言葉をもってしても捉えられない最高の頂きにいる。その神は「光を超えた闇に隠れている」という⁽³¹⁾。ここにいう「闇」は光が届かないから闇になるとか、光が不足しているから闇になるというありきたりの意味ではおそくない。光がありすぎるために、つまり異常なまでの光の横溢、光の過剰によって、光も闇も完全に超越しきった状態をあえて言葉にしたのである。とはいえ、それは私たちの理解の内側にある「光」という言葉では語るができない。そこでまったく反対の「闇」という言葉で、私たちの理解の外側にある「光」を語ろうとしたにちがいない。

つづく文章には、「このうえない暗闇で、このうえなく光を超えているものを、輝くことを超えて輝かせる」とある。まったく矛盾した表現のくりかえしによって、通常の意味をもってしては語りえない至高の世界に迫ろうとする。テレサの先駆者であるシエナの聖女カテリーナもこうした表現を多用した。「あらゆる善を超えた善よ、及びがたく、計りしれない善よ、あらゆる美しさを超えた美しさよ、あらゆる英知を超えた英知よ」と聖女は語る。そしてこの英知のきわみである神の領域を輝かすのは、「あらゆる光を超えた光」だという⁽³²⁾。

この世の光を超えた先に、光のあふれかえる闇がある。ディオニュシオスという不可知の世界へ向かうには、感覚の働きも知性の営みも放棄し、感覚や知性で捉えることのできる一切のものを捨て去って、あらゆる知を超えた、あらゆる知さえも及ばない「無知」—これも何かを知らないというありていの意味ではなく、人の側の知も無知も圏外に放り出したあげくの「無知」であろう—によって神との合一をめざすしかない。そのようにしてあらゆるものから解き放たれ、自分自身からも解き放たれ、完全に純粹で絶対のエクスタシーのなかで、存在のかなたにある「神の闇」という超越的な光の次元へと引きあげられていくのだという⁽³³⁾。

6. 光のあふれた先の闇へ

エクスタシーの語源はギリシア語で「外に立つ」ことを意味する。魂が体の外に抜けだした（と感じる）状態である。カトリック教会では「脱魂」という訳語を用いている。それは自分自身の「外に立つ」ことであると同時に、あらゆるものの「外に立つ」ことである。それはどのようにして実現されるのかというと、断じて自分自身の力によるのではない。人の計らいの及びもつかない神の絶対的

な力によって可能になるとされる。人をエクスタシーに没入させ、「神の闇」へと上昇させるのは神自身である。

ディオニュシオスは別の書物『神の名について』のなかで、言葉を変えて語っている。そこには「神の愛がエクスタシーをつくりだす」とある。神の愛は「愛する者が自分自身に属することを許さない。みずからを出て愛する者に属させる」というのである⁽³⁴⁾。ここでディオニュシオスはパウロの言葉を引いてくる。新約聖書「ガラテヤの人々への手紙」のなかでパウロは次のように語った(II-19)。「もはや私はキリストとともに十字架につけられている。生きているのはもはや私ではなく、キリストこそ私のなかに生きている」と。ここには語られたのはパウロと神との合一にほかならない。それは人の側からではなく、神の側からの働きによって実現している。パウロは神の愛によって心をつかまれた。ディオニュシオスによれば、パウロは「まさにエクスタシーの力で神とひとつになった」という⁽³⁵⁾。

神が人に働きかけるのである。人が神に働きかけるのではない。神が人を愛するのである。人が神を愛するのではない。ここに神の「選び」がある。新約聖書「ヨハネによる福音書」は言う(XV-16)。「あなた方が私を選んだのではなく、私があなた方を選んだのだ」と。エクスタシーもまた神のはかりによる。神が選びたもうことなのである。カテリーナも語っている。「あなたは御自分からあたえてくださり、かなえてくださり、満たしてくださる」と。聖女の心を信仰の光で輝かすのは神である。聖女の心を炎で燃えあがらせるのも神である。さらに言う。「誰があなたにそれを強いるのか。ただひたすらあなたの愛がそうさせるのだ」と⁽³⁶⁾。

ディオニュシオスはキリスト教神秘主義の土台となる否定神学の地平を切り開いた。神は無限の存在である。人は有限の存在である。有限の存在にすぎない私たちが、無限の存在である神を形によって表現することはできない。これは偶像否定の根拠のひとつとなった。そして同じように、有限の存在にすぎない私たちが、無限の存在である神を言葉によって表現することもできない。そもそも言語そのものが不完全な表現手段でしかない。「神は何々である」と語れば、神を人の側から限定することになる。だから「神は何々でない」と語ることで、つまり否定を通じて、言葉による限定をこえた神の超越性を認識しようと試みる。それが否定神学である。文章が否定辞ばかりになるのは当然であろう。

ディオニュシオスは『神の名について』に言う。「神は名もなく、言葉もなく、近づくこともできない高みにひとりである」と⁽³⁷⁾。孤高の存在である神に人が名をあたえることなどできない。言葉で語ることもできない。そんなことをすれば真理からますます遠ざかってしまう。だから「否定によって昇っていく道を選んだ」のである。魂はあらゆるものの否定を通じて、あらゆるものから解き放たれていくであろう。その先に神との合一があるという。このくだりは『神の名について』の終わり近くで語られている。神を名づけることの可能性と限界を語った書物の最後に、否定神学への道が開かれたのである。それが『神秘神学』へと接続している。

ディオニュシオスによれば、魂が至高の世界へと昇っていくとき、言葉は力を失ってしまう。言葉によって捉えられるものはいよいよ限定され、言葉はその限界をあらわにしていく。知を超えた神の闇のなかに入ろうとする者がそこに見いだすのは、完全な無言、完全な無知である。至高の世界へ昇っていくにつれて言葉は切りつめられ、昇りつめたところで「言葉はまったく響きを失い、語るこ

とのできないものと完全にひとつになる」という⁽³⁸⁾。

カテリーナもそれを語った。「私の魂はすっかり体を離れ、神の神秘をまのあたりにした。だがどんな旅人もこの世に戻ってからそれを語ることなどできはしない。これほどに崇高なものを語ろうとしても、記憶にはなんの力もなく、人の言葉はあまりにも不完全なだから」と⁽³⁹⁾。言葉によっては語りえないことを自覚し、あるいは絶望しながらも、それでも神秘主義者たちは言葉を尽くし、くりかえしその体験を語ろうとしたのである。

愛の矢のヴィジョンはテレサの直観が見せたものにちがいない。とはいえ、何もないところから突然出てきたわけではなかった。その根底には神秘神学の長い伝統があり、そこから流れ出たものがあったと判断できるであろう。

注

- (1) 拙著『エクスタシーの神学』ちくま新書、筑摩書房、2014、p.36.
- (2) Vítor Serrão, *Josefa em Óbidos*, Edição Quetzal, Lisboa, 2003, p.27.
- (3) Santa Teresa de Jesús (ed. Ferén de la Madre de Dios), “Libro de la vida”, *Obras completas de Santa Teresa de Jesús*, Biblioteca de autores cristianos, Madrid, 2012, III-1, p.39; 以下、訳文はいずれも原典から訳していく。次の邦訳も参照した。女子跣足カルメル会訳『イエズスの聖テレジア自叙伝』サンパウロ、1960；高橋テレサ訳『アビラの聖テレサ「神の憐れみの人生」』聖母の騎士社、2006.
- (4) *ibid.*, IX-3, p.64.
- (5) *id.*, “Moradas del castillo interior”, *Obras completas de Santa Teresa de Jesús*, Madrid, 2012, VI-5-6, p.542; 邦訳は以下のものがある。東京女子カルメル会訳『靈魂の城』ドン・ボスコ社、1966；高橋テレサ訳『靈魂の城 — 神の住い』聖母の騎士社、1992.
- (6) *ibid.*, VI-5-6, p.542.
- (7) *id.*, “Vida”, *op.cit.*, X-1, p.66; XIX-1, p.101.
- (8) *ibid.*, XX-1, p.108.
- (9) *ibid.*, XX-18, p.113.
- (10) *ibid.*, XX-3, p.109.
- (11) *id.*, “Moradas”, *op.cit.*, VI-4-13, 14, p.539.
- (12) *id.*, “Vida”, *op.cit.*, XX-3, p.109.
- (13) *id.*, “Moradas”, *op.cit.*, VI-4-5, p.537; VI-5-7, p.542.
- (14) *ibid.*, VI-4-8, p.538.
- (15) *ibid.*, VI-4-9, p.538; VI-5-1, p.540.
- (16) *id.*, “Vida”, *op.cit.*, XXI-6, p.117sq.; XXXVIII-5, p.208.
- (17) *id.*, “Moradas”, *op.cit.*, VI-6-4, p.544.
- (18) *id.*, “Vida”, *op.cit.*, XX-21, p.114.
- (19) Dionysius Areopagita, “De coelesti hierarchia”, *Patrologia graeca*, III, apud Migne Editorem, Paris, 1857, col.205, l.20.
- (20) Santa Teresa de Jesús, “Vida”, *op.cit.*, XXIX-13, p.157sq.
- (21) *ibid.*, XXIX-11, p.157; XXIX-14, p.158.
- (22) Silverio de Santa Teresa, *Procesos de beatificación y canonización de Sta. Teresa de Jesús*, I, Biblioteca mística Carmelitana, XVIII, Tipografía del Monte Carmelo, Busgos, 1934, p.96.
- (23) San Juan de la Cruz (ed. Lucinio Ruano de la Iglesia), “Llama de amor viva”, *Obras completas de San Juan de la Cruz*, Biblioteca de autores cristianos, Madrid, 2005, I-9, p.921; I-13, p.923；邦訳は以下のものが

- ある。山口女子カルメル会改訳『愛の生ける炎』ドン・ボスコ社, 1985.
- (24) 鶴岡賀雄『十字架のヨハネ研究』創文社, 2000, p.218.
- (25) Benedictus XVI, “Santa Teresa de Jesús, Profundamente contemplativa y laboriosa”, *Santos doctores de la Iglesia, Catequesis de Benedicto XVI*, Editorial Edice, Madrid, 2012, p.302.
- (26) Santa Teresa de Jesús, “Moradas”, *op.cit.*, VI-4-10, p.538sq.
- (27) *Septuaginta, id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes*, ed. Alfred Rahlfs, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1979, p.266.
- (28) *Biblia Hebraica Stuttgartensia*, ed. Karl Elliger et Wilhelm Rudolph, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 5a ed., 1997, p.1331.
- (29) Gregorius Nyssenus, “Commentarius in Canticum canticorum”, *Patrologia graeca*, XLIV, 1857, col.1048, l.42 : 邦訳は以下を参照。大森正樹他訳『ニュッサのグレゴリオス 雅歌講話』新世社, 1991.
- (30) *ibid.*, col.1045, l.19-23.
- (31) Dionysius Areopagita, “De mystica theologia”, *Patrologia graeca*, III, 1857, col.997, l.6 : 邦訳は以下を参照。キリスト教神秘主義著作集第一巻『ギリシア教父の神秘主義』教文館, 1992.
- (32) Santa Caterina da Siena (ed. Innocenzo Taurisano), *Il Dialogo della divina provvidenza*, Editorice Ferrari, Roma, 1947, CLXVII-6, p.122.
- (33) Dionysius Areopagita, “De mystica theologia”, *op.cit.*, col.1000, l.1-3.
- (34) id., “De divinis nominibus”, *Patrologia graeca*, III, 1857, IV-13, col.712, l.1-2.
- (35) *ibid.*, IV-13, col.712, l.7.
- (36) Santa Caterina da Siena, *Il Dialogo*, *op.cit.*, CLXVII-3, p.121.
- (37) Dionysius Areopagita, “De divinis nominibus”, *op.cit.*, XIII-3, col.981, l.9.
- (38) id., “De mystica theologia”, *op.cit.*, col.1033, l.34-36.
- (39) Raimondo da Capua (tr. Girolamo Gigli), *Vita di santa Caterina da Siena, serafica sposa di Gesù Cristo*, I, Libreria Pirola, Milano, 1851, II-6-21, p.176.

Ensayo teológico sobre la trasverberación de la flecha amorosa a santa Teresa

KIKUCHI Noritaka

sumario

La iglesia parroquial de la Asunción de Cascais en el oeste de Portugal conserva una pintura al óleo representando la trasverberación de la flecha amorosa a santa Teresa, mística española que comenzó la reforma de las carmelitas. Es una de obras seriales en alabanza de esta santa, hechas por Josefa de Óbidos, artista femenina de la época barroca del siglo XVII. Según lo que los escritos de la santa misma nos relató, un ángel se le aparecía y clavaba una flecha ígnea en su corazón algunas veces. En esto momento está sumido en éxtasis que también llama arrobamiento, es decir, como una elevación del ánimo experimentada en la oscuridad allende los luces llenas. La corazón traspasado se abrasó en amor celestial, ella logra la unión íntima con Dios, alcanzando un estado definitivo de la fe cristiana.

La tradición larga de la teología mística forma el fundamento de este don divino que se refleja un suceso extraordinario. El obispo Gregorio de Nisa, poblado en Turquía, uno de los Padres griegos de la segunda mitad del siglo IV, afirmó en su comentario sobre la sagrada escritura una unidad entre el ágape, amor de la bendición de nuestro Señor, y el eros, amor de los hombres que busca la verdad. Bajo la influencia de su teoría que conduce un perfecto acuerdo del ser supremo y de los seres humanos, un anónimo hermano religioso que hoy es identificado como Dionisio Areopagita, el cual viviría en Siria en el siglo VII, abrió un nuevo campo de la misticismo en la Iglesia católica. La visión sobrenaturale de de la flecha amorosa de santa Teresa se realizó así por esta marcha sucesiva de la teología mística.

palabras claves: santa Teresa, teología católica, misticismo, arte cristiano, España

原稿受領2014年11月14日
査読掲載決定2015年1月6日